

新聞記事より



サンタモニカ (アメリカ)

未婚者の卵子保存へ

大分の「セント・ルカ」などの施設

がん患者対象に

学会に申請

がんの治療で不妊になる恐れのある未婚女性の卵子を、将来の体外受精による出産の可能性を残すために凍結保存する初の臨床研究を、国内約百三十の民間不妊治療施設が加盟する団体が日本産科婦人科学会に申請していたことが二十一日、分かった。卵子の凍結保存は不妊治療の一環で行われているが、夫がいることが前提となっている。同日、学会の倫理委員会小委員会が検討したが結論は出ず、来年一月下旬に再び審議する。

複数の施設が連携し、ルカ産婦人科院長は「大分、体外受精させ出産につな
卵子を凍結保存する取り
組みは世界的にも珍しい
という。
申請したのは「A-R
P
ART日本支部」(支部
長・宇津宮隆史セント・合、保存していた卵子を棄する。

無事に卵子を採取でき
るかや、出産に至るまで
どの様な経過をたどる
かを調べるほか、子供が
出生した後の身体の様子
も追跡調査する。卵子の
採取は、北海道、宮城、

東京、石川、愛媛、大阪、
鳥取、愛媛、大分の九施
設で行う計画。
放射線や抗がん剤など
によるがん治療により、
生殖機能が失われたり低
下したりする可能性があ
り、未婚女性の間で卵子
の凍結保存を望む声が高
まっている。
宇津宮院長は「十代の
女性の場合、凍結保存か
ら結婚、体外受精まで十
年、二十年の長い期間に
わたる。その間、心理的
なサポートを含めて、が
ん治療の主治医と生殖医
療担当医、心理カウンセ
ラーらが連携して患者を
支えていく環境づくりが
課題となる。申請が通れ
ば、日本から世界に向け
て発信できる取り組みに
なる」と話している。

◀ 2006年12月22日
大分合同新聞

2007年8月29日 ▶
大分合同新聞

セント・ルカ産婦人科

不妊治療で体外受精をする
際、運動能力が高い精子
を選んで卵子と受精させる
が、妊娠に至らないケース
も多く、未知の原因が疑わ
れている。遺伝子の機能
異常との関連が解明され
れば、将来、診断や治療に
使える可能性もあるとい
う。

男性の遺伝子機能異常 不妊との関連研究

では、刷り込み遺伝子の機
能の異常で起こる奇形や病
気の割合が多いと報告され
ているためだ。有馬隆博東
北大准教授(婦人科学)は
「不妊男性の精子に遺伝子
の修飾異常があった可能性
が考えられる」と話す。
チームが一部の遺伝子を
対象に予備的に実施した調
査では、不妊治療中の男性
から採取した精子サンプル
の約四分の一、一―三つ
の刷り込み遺伝子の機能に
異常が見つかったという。
宇津宮院長は「このよう
な方面からの研究は、生殖
医療の安全性をより高める
ことにつながる」と話して
いる。

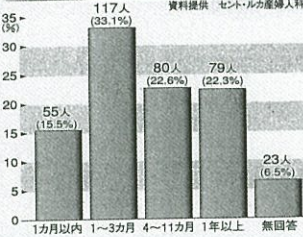
ライフ女性のサイト

赤ちゃんがほしい

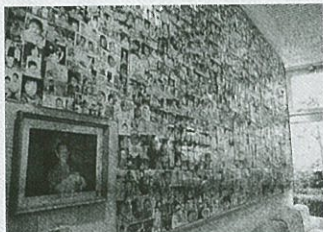
—生殖医療のいま—

赤ちゃんがほしいもなかなか授けられない夫婦が増えている。日本では約二十万、百四十万組の推定が、そのうち約二十万組が不妊治療を受けているという。果敢に不妊治療の最前線を行く分市セント・ルカ産婦人科(津市富原院)を受診した女性たちの話を聞いて、生殖医療のいまを探る。

「病院へ行こう」と思って、実際に受診するまでの期間



「できないう不安から解放へ 怖くて受診まで数年」



不妊治療で授かった赤ちゃんの写真が壁一面に飾られているセント・ルカ産婦人科の待合室

「妊娠できない体ではないです。ただ、治療を始める前に、治療に成功するまで待つ必要があるので、不安なまま待つことが多かったんです。友達のサポートで、不安なまま待つ必要はないんです。友達のサポートで、不安なまま待つ必要はないんです。友達のサポートで、不安なまま待つ必要はないんです。」

【モ】「不妊症とは、正確な年齢生活を送っているにもかかわらず、一年以上授けられない状態をいいます。女性の場合は、一年以上授けられない状態をいいます。男性の場合は、一年以上授けられない状態をいいます。」

◀2007年10月11日
大分合同新聞

赤ちゃんがほしい

—生殖医療のいま—

■2■

体外受精による年齢別妊娠率



※妊娠率は35歳を過ぎると下がり、41歳を過ぎるとさらに低くなる。逆に流産の恐れは高くなる。

5回目の体外受精で成功 年齢が妊娠率を左右

「長年、子どもがほしい。体外受精を何度か試みてはみたが、なかなか授けられなかった。40歳を過ぎた。もう一回試してみよう。もう一回試してみよう。もう一回試してみよう。」



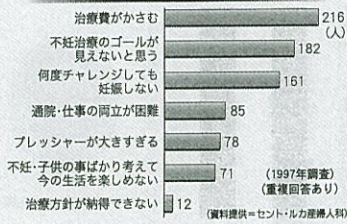
特産の赤ちゃんのニコニコ顔。妊娠5週、目頭や手足の膨らみは、きりきり分かる。

「5回目の体外受精で成功。年齢が妊娠率を左右。体外受精を5回試みたが、授けられなかった。40歳を過ぎた。もう一回試してみよう。もう一回試してみよう。もう一回試してみよう。」

2007年10月18日 ▶
大分合同新聞

ライフ 女性のサイト

不妊治療に関する悩み



受精卵(上左)・前期卵・中期卵(左)・胚盤胞(中)・受精卵(下)

治療いつまで継続？ ゴール見えず不安に

「【モセントルカ産婦人科を受診した】
結婚して3年、なかなか子どもが生まれず、不妊治療を始めて3年が経ちました。もう35歳です。治療のゴールが見えず、不安に感じています。もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。」

赤ちゃんがほしい

— 生殖医療のいま —

■5■

「不妊治療を受けながら『ストレスフリー』を希望する女性が増えています。『ストレスフリー』とは、精神的な負担を減らし、治療を受ける際のストレスを軽減することを指します。これには、治療のペースを自分に合わせて進めたり、治療の期間を短縮したりすることが効果的です。」

「卵子の質を高めるために、食事や生活習慣の改善が重要です。また、ストレスを軽減するために、リラックスできる時間を持つことも大切です。治療を受ける際は、医師とよく話し合い、自分に合った治療法を選びましょう。」

「夫のサポートが大切です。夫婦で協力して治療を進めると、精神的な負担も軽減されます。また、治療のペースを自分に合わせて進めると、ストレスも軽減されます。」

「【モセントルカ産婦人科を受診した】
結婚して3年、なかなか子どもが生まれず、不妊治療を始めて3年が経ちました。もう35歳です。治療のゴールが見えず、不安に感じています。もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。」

2007年11月15日 ▶
大分合同新聞

◀ 2007年11月8日
大分合同新聞

ライフ 女性のサイト

赤ちゃんがほしい

— 生殖医療のいま —

■6■

「【大分市の入籍した】
結婚して3年、なかなか子どもが生まれず、不妊治療を始めて3年が経ちました。もう35歳です。治療のゴールが見えず、不安に感じています。もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。」

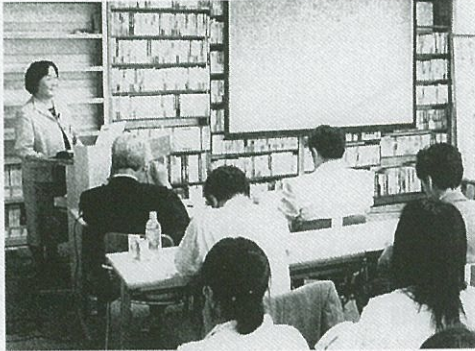
夫婦2人の人生を選択 信頼し合い前向きに

「【モセントルカ産婦人科を受診した】
結婚して3年、なかなか子どもが生まれず、不妊治療を始めて3年が経ちました。もう35歳です。治療のゴールが見えず、不安に感じています。もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。」



「【モセントルカ産婦人科を受診した】
結婚して3年、なかなか子どもが生まれず、不妊治療を始めて3年が経ちました。もう35歳です。治療のゴールが見えず、不安に感じています。もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。夫は、もう諦めようかと悩んでいます。」

「不妊患者の心のケア大切」



セント・ルカセミナー

当事者の心理状態を説明する岡本祐子教授

第16回セント・ルカセミナーが大分市のセント・ルカ産婦人科(宇津宮隆史院長)で開かれた。生殖医療の先端的な研究や不妊患者の心理的なケアなどをテーマに専門家が講演した。

生殖再生医学アカデミアの森崇英理事長(京都大学名誉教授)は「万能幹細胞に由来する配偶子研究の可能性を解説するとともに、継代的安全性や「生」そのものを対象とする生命倫理を樹立することが求められる」と話した。

広島大学大学院臨床心理

研究室の岡本祐子教授は「子どもに恵まれないという予期せぬ人生の危機をどう受け止めるか」をテーマに講演。不妊治療初期の「子どもを持つ」という期待や生殖医療への信頼、不妊治療集中期の焦りや不安、自信喪失、病院不信、不妊治療終結期のあきらめや「子どもを持たない人生」の受容、自己肯定など、それぞれの段階での当事者の心理を説明。厳しい現実を直視した当事者の心に寄り添って支える心理臨床的ケアの大切さを話した。

不妊体験者同士の「分か

◀ 2009年6月13日
大分合同新聞



職員とのミーティングに臨むセント・ルカ産婦人科の宇津宮隆史院長(左)。不妊治療の最新情報に聴取者の関心が押し寄せている＝大分市

未来をはぐくむ
地域と歩む子育て

第4部・晩婚化の周辺③

「わが子を不妊治療 年齢と負担の間でもがく」

気持ちは落ちた。同級生や友達に妊娠を喜ぶことができません。子どものことを心配するのが辛くて、夫の実業も足が速い。なやましさを失って、不安定な生活を送っています。不妊治療は、年齢と負担の間でもがく。晩婚化の影響で、年齢が高くなるほど、不妊治療の負担が増える。高橋なほみ(若狭市)が、不妊治療の経験から、地域と歩む子育ての大切さを話した。

「子どもを持つ」という期待や生殖医療への信頼、不妊治療集中期の焦りや不安、自信喪失、病院不信、不妊治療終結期のあきらめや「子どもを持たない人生」の受容、自己肯定など、それぞれの段階での当事者の心理を説明。厳しい現実を直視した当事者の心に寄り添って支える心理臨床的ケアの大切さを話した。



院長は、治療に対する適正な保険料と助成金の増額を社会に訴えかける。

「加齢に伴って生殖機能が低下する。不妊治療を受ける女性が増えている。治療費が高額になる。収入が減少する。生活が苦しくなる。年齢が高くなるほど、不妊治療の負担が増える。高橋なほみ(若狭市)が、不妊治療の経験から、地域と歩む子育ての大切さを話した。

▶ 2010年7月22日
大分合同新聞

健康リサーチ

不妊症の生殖医療

セント・ルカ産婦人科 大分市

おおいた 医療最前線

現場リポート

健康な性交渉のある夫婦で、2年間赤ちゃんが授けられない場合を不妊症といいますが、7組に1組は不妊症といわれています。大分市のセント・ルカ産婦人科は不妊治療の専門施設です。宇津宮隆史院長に聞きました。

「開業して18年半ですが、これまでで妊婦数は、5002件です。妊婦成功率は、きちんと通院して治療した人は90%、途中で来なくなると排卵を誘発するなどは、よって排卵を誘発するな



宇津宮隆史院長

受精卵の呼吸量測定 高いと妊娠率が倍に

移植する必要がある。呼吸量測定は、受精した卵子の呼吸量を測定し、呼吸量が高い卵子を選別して移植する。これにより、妊娠率が倍に高くなる。呼吸量測定は、受精した卵子の呼吸量を測定し、呼吸量が高い卵子を選別して移植する。これにより、妊娠率が倍に高くなる。

「ARTで生まれた赤ちゃんの健康状態は、一般に比べてどちらかといえば異常は少ないといわれています。これについては、来年3月から、ARTで生まれた赤ちゃんの健康状態を調査する予定です。ARTで生まれた赤ちゃんの健康状態を調査する予定です。ARTで生まれた赤ちゃんの健康状態を調査する予定です。」



移植する必要がある。呼吸量測定は、受精した卵子の呼吸量を測定し、呼吸量が高い卵子を選別して移植する。

◀ 2010年12月25日 大分合同新聞

おおいた 医療最前線

現場リポート

◆73◆



宇津宮隆史院長

子宮筋腫に対する腹腔鏡下子宮筋腫核出術

セント・ルカ産婦人科 大分市

傷つきにくく癒着少ない 妊娠を望む人に有用

腹腔鏡下子宮筋腫核出術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。手術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。手術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。手術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。

「腹腔鏡下子宮筋腫核出術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。手術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。手術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。手術は、子宮筋腫を腹腔鏡を用いた手術で取り除く。」



腹腔鏡下子宮筋腫核出術 腹腔鏡 核出した筋腫(2ヶ月)